統合的思惟のゲシュタルトと構造 ①
(Gestalten und Strukturen des integrativen Denkens)

レオ・カブリエル（Leo Gabriel）②
山　下　一　道訳

「あらゆる思惟と存在にはひとつの法則が根拠となっている。それは全体と部分、等しきものと異なったものについての法則である。」

——アリストテレス——

論理学が主題的に扱う対象は思惟の事実的過程——これは心理学の対象であるが——ではないということ、このことは、論理学があらかじめ抽象的に構成された「思惟の諸形式（Denkformen）」、つまり、あらかじめ考えられた思惟の形式主義に関係しているとか、あるいはまた、関係しなければならないということを意味するのではない。そういうあらかじめ考えられた思惟の形式主義は、現実の思惟、即ち「思惟する思惟（das denkende Denken）」からは遙かに隔ったものである。なぜなら、思惟によるこのようなア・プリオリな構成の規準と規則が、思惟の真に妥当する規準と規則でなければならないということ、いや、そもそもそうありうるということ、こういうことは全く疑わしいことだからである。形式論理学の発展の歴史が示すように、現実の思惟は、その思惟に本質的な意味連関、真理関係そして諸可能性を伴っているので、構成された論理学の体系から、この体系が、意味と内容を欠いた「記号（Zeichen）」からなる諸関係の同語反復的結号であるが故に、一貫して排除される。論理学の理念がこのような（記号からなる関係の結合という）ゲシュタルトにおいてのみ実現可能であるとしたら、このことは、一元的要求として、数学的な構成的性格をもつ領域においても危機に陥るように思われる類いの恣意的な仮定である。というのも例えば、サイバネティックスの体系においては、実質的で全体的な構造が明らかになるからである。論理学を根底的に拒否することは、例えば、ハイデッガーの場合（「論理学の理念は……のうちに融けこんでいく（Die Idee der Logik löst sich auf……）」③）の如く、この危機からのひとつの帰結である。形式論理学の危機においては、現実性がその綜体性のうちで反省され、思惟と存在の関係が顧慮されることにより、矛盾を投入し、形式論理学の積極的否定を遂行した弁証法へと立ち至った。矛盾の積極的投入から、確かにヘーゲルの場合、その否定の否定において、相対立する体系の全体の合一と相互止揚を可能にはするが、内容的に無規定な一つの形式主義が生じた。なぜなら、この弁証法の形式は、原理的に内容が無規定であるが故に、例えば、唯物論的体系内容と同様に観念的論体系内容で満たされることができたからである。しかし、この形式的弁証法は、まさに、その内容的、対象的規定が不可能であるが故に、学問的思惟にとって、結局は役にたたないものとして証明されねばならなかった。実質的弁証法を論理形式と結合させて道を開くことは、具体的なものと全体という弁証法

的契機が、意味のゲシュタルトと構造という論理形式のうちで獲得されるならば、積分法(Integration)の原理から達成される。統合論理学は、このような試みを叙述する。更に、この立場では現象学によって喚起された内容に関する要求を（純粋に直観的な方法の適用によって）範疇的な思惟形式へ還元することなしに、論理的なもののもつ意味と意義という性格のうちで満たすことができる。原理的に内容と形式を統合して、論理的、方法論的に分離する傾向と動機とを綜合する試みは、決して機械論的な混在主義（ ein mechanischer Synkretismus ）ではない。この綜合は、むしろ、或る新しい綜合の理念、即ち、積分法という綜合原理からなる論理秩序（ ordo logicus ）の構想である。この綜合原理は、今日、多種多様に論じられているが、統合論理学においては、我々は、この原理のもつ論理的次元を反省し、それによって、その論理的根本形式を明らかにしようと思う。

統合論理学は伝統的古典論理学から区別されないといった粗雑な考察、これは「概念」「判断」「推論」といった伝統的な術語と区分の使用から生じることであるが、このような考察がなされる場合のことを仮定してみよう。勿論、術語が同一の場合、注意されないことが多いが、「単語」の意味の変遷が問題なのである。それ故、例えば「現象学」という語は、ヘーゲルとフッサールの場合では、全く異った意味を持っている。従って、ここでは同じ語をむしろ一つの両義性として見なさねばならない程である。言語の歴史において、単語は変わることなく、その意味が幾度となく変遷していることが、見い出されるが、新しい意味の次元への進出は、多くの場合、新しく言語を創出することによっては保証されない。物理学が要求する如き、精密な陳述においても、古典物理学から量子論への移行は、ハイゼンベルクの示唆するように、言語におけるかくの如き緊張状態によって特徴づけられる。「統合（ Integral ）」という語にとっても、この事情は同様である。

伝統的論理学の論理形式と統合論理学における論理のゲシュタルトの区別は、或る比喩によって一目瞭然となる。一本の直線が定規を用いてひかれ、この「定規の直線」が直線として把握され、確定される場合を想定してみよう。その場合、定規を用いて一定の手順で方法的に実現された直線が、空間における抽象化と孤立化とによって直線それ自体として作られていることは明らかである。このような方法論的に抽象的な反省にあっては、直線を孤立させ他のすべてのものを捨象して、抽象的形式的概念が、ひいては、綜体性が崩壊した状態で、形式的概念的な同一性において直線が構成される。

しかしながら、直線をひく場合、直線が実際にひかれる際に、その周囲が一緒に関係づけられるなら、つまり、直線がひかれる空間としての平面が、線分によって区分される全体として、そして、区分された全体として具体的に形成されるならば、その場合、直線は具体的に全体を形成しつつ、同時に全体を区分する契機として、全体から把握される。そして、具体的概念における全体的規定のうちで、相補的統合性からなる論理的ゲシュタルトとして理解される。具体的概念というのは、決して他から孤立する自己規定の中を形式的にいつまでも循環する概念ではなく、全体という現実性のうちにまで歩み入り、この現実性のうちで、全体のゲシュタルト構造とその構造を形成しているという具体性へ到達する概念である。この点で、統合論理学の弁証法との区別も説明される。弁証法的反省は、概念のもつ抽象的な被規定性と被制限性をこえて全体へと、換言すれば、（概念的）同一性から綜体性へと広がりゆく。しかしそれは、一契機としての概念を広がりゆく運動の中

へ投入し、そして、否定を通じて進行する回帰的反省において、まさしく、概念の同一性へ立ち帰るという仕方で広がるのである。それ故、結果として、この同一性は思惟の運動の閉鎖的循環関係のうちで綜体性として実現されることになる。弁証法的な思惟の道筋では、概念を越えることはできないのである。むしろ概念が否定というえせの超越によって媒介され、その概念のもつ空虚な無規定性が、対立を止揚するという弁証法的に内容なき地平として、具体化されるのである。そしてこの地平は唯物論的にと同様に、観念論的にも実現される。

それ故、この概念を超越するということ、それは弁証法においてその発端をもつが、このことは、徹底して遂行されねばならない。それは、形式概念の自己運動のうちに常に閉ざされた循環運動から、移行的な仕方で脱出し、概念のもつ論理的ゲシュタルトという現実性へ至るためであり、且つ、その現実性において思惟が存在に対して開かれているということへ到達するためなのである。

統合論理学は、思惟をその形式的構成面のうちにア・プリオリに制限してしまうことになるような考えられた思惟から出発するのではなく、ゲシュタルトを現実に荷っている思惟する思惟から出発するのである。その場合、心理学において問題とされる主観的思惟作用が重要であると考えるような誤解は除外されねばならない。主観と客観は、分離され対立させられている場合には、既に抽象である。具体的な思惟においては、主観と客観は、具体的構造のうちで相補的に統合されている。主観と客観のこの統合は、具体的な在り方のうちで、例えば、観測者と観測されるものが或る一定の観測状況において、「相補的（komplementar）」な統一を形成している物理学において示される。主観ー客観ー全体という接合構造においては、思惟のゲシュタルトはその実際の運動のうちにおける具体的在り方として実現されている。思惟する思惟は、ひとつの全体をこのような仕方で荷い実現するものとして現実的なのである。換言すれば、思惟が本質的に対象に向けられていること、即ちその志向性——思惟されるものなくしてはいかなる思惟も存在しない——の故に思惟は自己が主観的に志向する現実から客観的な志向的現実性へと移りゆく作用として現実的である。その結果、思惟のゲシュタルトがもつ意味の現実性が重要となる。思惟がその現実性のうちで、客観的な具象へ向かうこの運動を、ヘーゲルも又、弁証法的方法として初めてうち立てた。しかし、ヘーゲルの弁証法は存在と思惟の同一性としての絶対概念という抽象的発端から始まり、それによって、概念が自己自身を具体化していく自己運動へと移りゆくのである。その結果、概念を具体化することから、自己自身へ回帰する概念の弁証法的「経験」が生じる。しかし、統合的な具体的思惟は、概念を越える意味の段階において展開される。従って、この思惟は、抽象的概念による形式的図式によっても、弁証法的図式によっても、換言すれば、アリストテレスに従っても、ヘーゲルに従っても解釈されない。この思惟は、その名が示す如く、論理的ゲシュタルトを通じて、意味を具体的に実現することである。（意味は、言葉をもったロゴスとして、言語における論理現象を形成する。）

（合生する（concrescere）に由来する）具体的なものとは、全体的な接合関係に基づく全体構造から生じる。この接合構造（Gefüge）とは、各部分がそれぞれ全体へ接合されるという在り方において、全体を具体化するという構造であり、それ故、構造主義における抽象的な構造のア・プリオリではない。ゲシュタルト（Gestalt）とは、統合論理学（integrale Logik）では、方法である即ち、一つの「体系（System）」の全体へと至るべく、意味を展開する移行的諸段階において、意

味を形成する方法とみなされる。

統合的な具体的思惟は三次元的である。この思惟は、思惟と経験、形式と内容、そして言語と（判断の論理形式とは決して一致しない）言明における現実性の間のそれぞれの統合関係から構成される。統合的な綜合という仕方で自らを形成するという特徴をもったこの思惟は、その創造的性格によって特色づけられるということは注目に値することである。ゲシュタルトという方法は、古代の静的概念とは反対に、ゲシュタルトのもつ動的概念にもとづいているのみならず、その力学は同時に創造的である。勿論、このことは、思惟がその対象としての現実性を、その形式、即ちカテゴリーのうちでア・プリオリに構成し、それによって、経験的実在性を超越論的観念性のうちに解消することができるかのような観念論的な意味においてでもなく、しかし、又、思惟が現実性を現象から抽象的に推論し、演繹し、根拠づけることができるかの如き、実在論的な意味においてでもない。この両者の場合には、ア・プリオリに、思惟と経験の対立から出発している。思惟と経験は、しかしながら、同一律に従って相互に還元されうるものではなく、却って、その差異性（Differenz）において、一つの統合的、即ち、相補的な統一をなす。換言すれば、その中で、諸部分が全体のうちに包摂されることも、又、総計されて全体となるというのでもなく、そうではなく、各部分が、それぞれ余すところなくその完全な状態で保たれているような全体である。形式と内容、思惟と経験、言語と現実性が、このようなゲシュタルトという論理的様相において構成される場合には、全体の接合構造において構成要素がこのように統合されていることが、決定的に重要である。思惟はその根源的な具体性とゲシュタルトにおいてのみ、即ち、その原初形式のうちでのみ、意味を実現し、意味現象を思惟形式の中で構成することができ、それとともに自らを、その具体的に構成された事物と人間への関係のうちで――言語空間のうちで――実現することができる。

形式と内容の全体の統合から意味現象が実現される場合、思惟はその具体的なゲシュタルトにおいてのみ創造的であるということを我は、既に強調した。この場合、内容とは言明の特殊な内容と対象、それらには、論理学は当然かかわることはないのであるが、このような内容と対象ではなく、形式がゲシュタルトという性格を持つ場合の、原理的な内容性を意味する。それ故に、ウィトゲンシュタインは、論理形式を構成することに対し、それが、内容上の意味を充実する可能性をもつことを拒否したのは正しかったのである。純粋な論理形式とは、実際には、抽象であり、それ故に、意味を欠いた形式にすぎない。具体的な思惟のみが、その論理的ゲシュタルトにおいて、現実性に対する原理的な意味連関をもつ。このような思惟のゲシュタルトに対して、我々は、実践への関係を外部から、抽象的形式によって媒介されないような方法によって、付加する必要はない。なぜなら、「実践（Praxis）」は、具体的思惟に含まれており、その上更に、この思惟は、意味を意識している行為の根源であり、端初であるからである。

それにも拘らず、ゲシュタルトとしての諸連関のうちで現実的である思惟を芸術と芸術的創作の分野に制限することは誤りであろう。創造的であることは、人間精神にとってすべての分野において固有なことであり、学問の分野においても又そうであり、技術の領域においても、明らかにそうである。あらゆる現実化の基礎となっているこの形成的にして原初的な思惟を、意味を構成する創造的な運動の中で追求し、この具体的思惟に妥当する形式の諸法則と構造を明らかにすることこそ、

統合論理学の試みなのである。

ゲシュタルトとして具体的であるとは、相補的な統合構造の実現として、形式と内容が綜合されていることを意味する。分析的な構成要素からの合成の事例、例えば、ア・プリオリな形式(範疇)と、ア・ポステリオリな内容（現象）からの合成は、カントの超越論的論理学においては、ゲシュタルトとして具体的な接合構造からなる綜合統一に達しておらず、そのように抽象的に立てられた要素は決して、この具体的接合構造に結合されないのである。具体的な思惟とは、思惟と経験の構造的な統一というゲシュタルトのうちで、形式と内容の原初からの統合的統一を形成することを意味し、このことは、統合構造のうちで具体化された解釈において、即ち、言語と世界の間の移行的な意味連関のうちで、言明とその現実性との統一という契機をもつ言語において表現される。思惟と経験の統合のゲシュタルトは、前述の如き形式と内容の綜合に関して、知覚と概念、明証性と判断、そして直観的綜合と体系の間に成立している。

知覚、明証、直観は、概念、判断、推論体系という思惟の構造に対応しており、この対応においてそれぞれの構造を実質的（内容的）に包摂する関係をなす。これらの思惟構造は、この補完関係のうちで、自己を展開する形式をもち、その形式は、移行的展開の中で、内容に従って独自の位置を得る。この移行的な構造の変様として、知覚から概念が、抽象的、演繹的な仕方によるものでも、弁証法的過程からでもなく、まさに移行的な綜合というゲシュタルトから生ずる、知覚と概念は、その差異における補完関係のうちで依然、共に完全であり、相互に独立でありつづける。というのも、この補完関係は、具体的なゲシュタルトにおいて、その差異を廃棄しないからである。知覚と概念は、互いに同一視されることもなく、又、相互に還元されることもない。これらは、その差異性にもとづいて、真の相違のうちで相補的に関係している。論理的ゲシュタルトの根源において、その差異性と統合的統一は共に保持されているのである。この論理形式は、ここでは、抽象作用によってではなく、移行によって、即ち、それを展開する形式のレベルへの移し入れによって、そのゲシュタルトの現実化を受けとるのである。

経験と思惟の統一は、それ故、決して同種のものの統一（同一性）ではなく、差異性からなる全体の統一（綜体性）であるが、しかし、この統一は、単なる形式的な差異と、（否定の否定による）弁証法的止揚から成り立っているのではなく、むしろ、そのうちでこの潜在的差異性が、つねに緊張関係のうちにあり、それ故に、より以上の意味の展開を創造する可能性が絶えず保持されているような一定の意味のゲシュタルトのうちにある。

形式と内容の接合構造は、形式的段階（概念、判断、そして推論）とそれに対応する実質的段階（知覚、明証、直観的理念）から具体化され、そしてそれは、論理体系というゲシュタルトのうちに統合される。そしてこの体系こそ、ゲシュタルト論理の統合の最高段階を表わしているのである。

経験は、知覚において構成されるが、それは諸対象が時間、空間において構造化され、解明されることである。志向的解明、即ち、対象を実在的に創出するのではなく、諸対象に向けられ、対象を形像（Bild）のうちで現わすという解明のうちで、対象的知覚経験における思惟の構造的な在り方が明らかになる。この解明のうちには、すでに形象（eidos）が――感覚的形象は意味形象として表出しており――従って、表示が与えられている、即ち、物は空間的対象として表示している。

この形象は、時間的に統合された現象の連関のうちで、ゲシュタルトの推移として現実的である。それ故、反省は、すでに知覚とそれを論理的に表示する包括的な構造のうちで、具体的に生起しており、概念的性格のうちで初めて起こるのではない。(反省は現象として、ヌウメノンと同様に現実がその中に存在する形式ではなく、現実を解釈しつつ表示する表出機能である。)

思惟は、それが経験のゲシュタルトのうちに含まれているが故に、この経験のゲシュタルトから移行的綜合によって、思惟形式のゲシュタルトのうちへ移し入れられる。そして、このようにして、思惟は、自らの内で、より高次なる反省段階における独自な形式へと、到達するのである。このように或るゲシュタルトから他のゲシュタルトへ、ある水準から他のより高次の水準へ移し入れることが、構造の展開として、まさに「移行（Translation）」なのである。この移行関係についての誤解は、それが一種の抽象として理解されたという点にある。移行は、まさしく抽象の反対である。思惟は、知覚と知覚の対象を同一化するために、知覚から抽象されるのではない。まさしく、知覚（「直観」）と思惟（「概念」）の差異こそ、それら相補的な統合的統一の形成にとっての制約であるが、この統一は、同種のものの統一ではなく、全体の統一であり、従属関係からなるのではなく、同等関係からなる全体の統一である。周知の形式的、概念的な思惟の図式、即ち、同一性という図式機能は、統合と、そのうちに基礎をおいている移行関係の理解に対して最大の困難をひきおこす。この移行は、感官の形象を意味形象のうちへと創造的に、形成しつつ譲渡することとして遂行される。この譲渡は、移行関係においてはあらかじめ直観的「形象」のうちに包括されており、それは、プラトン、アリストテレスの（類から種への）分割の手続き（Diärese）における如く、概念体系を抽象的に構築することによってではなく、移行的に形成される意味の綜合を通じて、知覚の対象的世界を、思惟の対象的世界へ譲渡することとして遂行される。知覚世界の諸対象を、空間において構成することは、諸対象を最終的に、思惟の世界に限定することとなる。感官の形象は、形成された徴表（Symbol）と記号関係のうえで、即ち、言語体系において、明白な意味形象となる。

経験（知覚）は、概念的性格をもった思惟においても、切り離された部分や、断片のように、抽象の途中で置きざりにされることは決してない。あらゆるものが、独立的で異っている場合でさえ、経験が現に在ることは、具体的な論理的ゲシュタルトという構造をもつ思惟において常に維持されている。そのように、論理的諸形式は、経験が現に在ることを通じて、経験からの移行という素性のうちで構成される。例えば、限定性、意味の形象性、対象性といった概念は、すでに、知覚のうちに、その直観的なゲシュタルトにおいて含まれている。（メルロー＝ポンティ〈眼と精神〉参照）

経験全体の内部で、論理的に重要な三つの差異化がみられる。概念が知覚と結合するように、判断は明証性と、そして、体系は直観的な仕方でこの体系の基礎となっている理念（体系の「根拠を思惟すること」）と結びついている。判断は明証性なしには、その論理的に完全な具体性に到達しない。明証性は判断の論理的ゲシュタルトに属しているので、明証を欠く場合には、判断は、その妥当性を失い、原理上、維持されなくなる。明証性に最初から多種多様な仕方で伴われている主観性は、判断が、自己の明証性を論理的に、即ち、自己の根拠を他の判断との連関のうちにもつということから構成できるならば、判断のうちで廃棄される。それ故、概念が判断の全体のうちではじめて、即ち、知覚に対して純粋に並例的で同等な関係づけのうちで――このような関係づけのうちでは、知

覚の対象は、概念を通じて一定の仕方で解釈されるが、しかし、対象の実在性そのものとして主張されるのではない――その客観的な現実的統合を獲得するように、判断も、又、他の諸判断との連関においてのみ、その根拠づけと、更に、判断において保持されるべき可能性を受けとる。従って、概念、判断、推論というのは、知覚、明証性、直観的理念に対して要求される関係にもとづいて、展開された体系全体の意味へと至る途上における論理的統合の諸段階である。

明証性は、他の諸々の判断との根拠づけの連関からのみ、論理的に、個々の判断において獲得される。このような根拠づけの連関はその連関の綜体のうちで展開されて、第一の判断、即ち、原則へと至る（原則とは、そこから他のすべての命題が、つまり、体系の全体が、その結果として生じるような原理の始まりである）。原則、即ち「第一命題」としての「原理」は、最早、他の諸命題から導出されない。さもなければ、それは、第一命題でなくなる。しかしながら、原則は、自らを他のすべての命題の主として示す判断として、まさしく、他の各々の判断と同様に、論理的にみると、根拠づけられるという要求に従っている。が、この要求は、最早、何か或る判断によっても、そして、そのような判断の導出可能性によっても、つまり、形式的な論理的演繹による展開によって満たされることはできず、むしろ、実質的にのみ、メタローギッシュな根拠の包含によって満たされることができる。勿論、それは、個々の感性的経験、即ち、知覚によるのではない。知覚は、厳密に単一な個別　包括として、体系の綜体に対応しておらず、それ故、体系を基礎づけることはできないからである。従って今や、体系を根拠づける全体的包括が重要であり、メタローギッシュな根拠としてのこの全体的包括とは、根拠を思惟することとして直観的に与えられる理念を通じて、体系のうちに、移行的な仕方で、帰納的に移し入れられて、体系のうちで論理的に展開される。この体系も又、それに対応する全体的内容と全体的形式からなる一つのゲシュタルトである。この移行的な仕方で展開される思惟の運動は、相補的に統合しつつ、概念と判断とに区分された全体に対して、根拠づけの連関を形成している。が、この思惟の運動は、因果関係の導きに従ってのみ行われる。それ故、この思惟の運動は、因果関係が同一律の関係へと還元されることによって変形を蒙り、換言すれば概念と概念関係のレベルに還元され、媒概念（M）を通して、下位概念（S）を上位概念（P）のうちに包摂するという概念からなる推論の運動へと変形される。「分析論（Analytik）」としてのアリストテレスの三段論法において、この統合的な在り方にもとづいて推論を進める思惟の運動は、包摂（Subsumtion）という手続（順）に従って、概念のレベルへと、即ち、本質概念を定義と分類によって推論する論理学の粋内で連続的に媒介された概念形成へと還元される。その結果、論理的なもの（das Logische）は抽象的な概念の Modell のうちへ、従って、同一性と抽象的論理形式からなる図式主義へと制限される。思惟の運動が本来持っているその形式規定としての因果関係は、今や、同一律が、それに乗って活動する車となる。その結果、体系のもつゲシュタルトは、その綜体性が同一性へと変造され、変形されるというデフォルメ（Deformation）を被る。このことは一元論的、観念的な諸体系（「すべてのものは物質である」「すべてのものは精神である」等々の型に従う体系）のうちで生じる。それ故に、論理的な体系のゲシュタルトにおけるこのデフォルメが指摘されるなら、体系の論理的偽造を批判することが可能となる。公理による定義を通じて、体系の根拠が定義された概念として定立される場合、つまり、同一律の原理にもとづいて展開される

場合、その結果、体系の根本概念に既に含まれているものだけが包含され、他のものはすべて排除されるというような体系、即ち、閉ざされた体系が生じる。このことは、必然的に或る綜体概念のもとで現実を全体として客対化し、そのもとに包摂することを意味する。が、このような綜体概念は、概念としてのその論理形式のうちで、常に全体から限界づけられた一部分のみを対象的に規定し、それを全体から分離するだけであり、その結果、このような綜体概念は、体系構成を展開する場合、部分を全体として措定し、それに伴う論理的に必然な帰結として、全体を否定する。そして、思惟の現実に対する関係のうちで、全体を概念的に抽象して体系化することにより、具体的な全体を崩壊させなければならなくなる。この具体的な全体の破壊は、開かれた体系（Offenes System）としての論理的ゲシュタルトと構造によってのみ克服される。根拠（Grund）と対象性（Gegenständlichkeit）との間には、論理的な意味での根本的差異が存在する。換言すれば、対象的概念的な仕方では規定されない、つまり、原理上メタローギッシュな体系全体の根本連関と、因果律に従って同一律に還元されえないこの根本連関が論理的に展開されることとの間に根本的差異が存在するのである。それ故、この体系はその論理的ゲシュタルトにおいて、このゲシュタルトの根拠がメタローギッシュな仕方で与えられていることに対して、常に開かれた在り方で存在している。そして、この体系は、それが本来的にもつ相対性（相対主義とは何のかかわりもない）のうちで、即ち、如何なる体系といえども、現実性の全体を決定的に余すところなく一つの体系の中に収めることができない故に、その体系が他の諸体系と共有する個別的ではあるが、その体系に独自な絶対的妥当性のうちで存在しうるのである。このような全体へのかかわりと分与によって、この体系は、他の諸体系に対して、歴史的に、対決させられ、それらと論争し、それによって自らを発展させることができるような開放性（Offenheit）を獲得する。一つの対話といえども、開かれた体系の間でのみ可能である。統合論理学は、開かれた体系として形式的弁証法ではないが、疑いなく、一つの対話的方法なのである。

註

① ここに訳出した論文「統合的思惟のゲシュタルトと構造（Gestalten und Strukturen des integrativen Denkens）は、レオ・ガブリエル教授が、1968年、ウィーンで開かれた第14回国際哲学会におけるコロキウム：「統合的思惟における綜合の意味——特にその全体的構造を顧慮して——（Die Bedeutung der Synthese im integrativen Denken unter besonderer Berüchtigung ganzheitlicher Strukturen）」に寄稿されたものである。この論文は、ガブリエル教授夫妻が、1976年来日された際、御親交をもたれた広島大学総合科学部小川侃氏に、教授の帰国後送られてきたものであるが、1977年10月より訳者にガブリエル教授の許で学ぶ機会が与えられたことにより、はからずも山下が翻訳することになった。翻訳の機会を与えて下さった小川氏に心より御礼を申し上げたい。

② レオ・ガブリエル（Uni.-Prof. DDr. Leo Gabriel）。1902年9月11日、ウィーンに生まれる。1926年、ローマにてスコラ哲学の学位を得、1929年、Heinrich Gomperz 教授の許で、「プロティヌスの神の概念（Gottesbegriff Plotins）の学位論文で、哲学博士（ウィーン大学）となる。

1932年～1948年、ギムナジウムの教官として哲学と歴史を教え、1947年：Alios Dempf 教授のもとで、教授資格（Habilitation）取得、講師となる。1950年、ウィーン大学助教授（a. o. Prof.）、1951年、正教授（o. Prof.）となり、その後、ウィーン大学哲学科第一講座主任教授（Inhaber der Lehrkanzel I. Philosophischen Institutes）1968～73年、国際哲学会会長（Präsident der Fédération Internationale des Sociétés de Philosophie : FISP）。現在ウィーン大学退休正教授（emer. o. Prof.）、国際哲学会名誉会長。1948年以来現在も、哲学雑誌「学と世界像（Wissenschaft und Weltbild）の編集代表である。

主要著書

(1) 「世界観の論理学（Logik der Weltanschauung）」Graz-Salzburg-Wien. 1949. (A. Pustet)

(2) 「ブラーマから実存へ（Von Brahma zur Existenz）」Wien-München. 1. Aufl. 1949.（Herold）、2 Aufl. 1954（Herold）

(3) 「実存哲学（Existenzphilosoplie）」、Wien-München, 1. Aufl. 1954（Herold）、2 .Aufl. 1968（Herold）

(4) 「インド思想入門（Einführung in indisches Denken）」、Salzburg .1957（O. Müller）

(5) 「統合論理学ー全体の真理ー（Integrale Logik — Wahrheit das Ganzen —）」, Wien — Freiburg — Basel, 1965,（Herder）.

論文

(1) 「新しい論理学の位置（Position der neuen Logik）」 in Wissenschaft und Weltkild, 1948. Wien）

(2) 「意味と真理（Sinn und Wahrheit）」（in：Sinn und Sein, Ein philosophischen Symposion; Tübingen, 1960（Niemeyer）等々、その他多数。

③ Martin Heidegger, "Was ist Metaphysik ?" Frankfurt, 5 Aufl. 1949. S. 33)

〔獨協大学非常勤講師〕